

学林舎情報

NO. 215

共創ネットワーク

●発行日：2020年6月20日（土）

〒661-0035 兵庫県尼崎市武庫之荘3-19-3 TEL 06-4962-5876 FAX 06-4962-5877 e-mail info@gakurin.co.jp

発行:教材出版 学林舎



学習の行き先 受験生のみなさまへ

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、3月初旬から、全国の小学校・中学校・高等学校が臨時休校になりました。当初は2019年度の春休みに入る前ごろまでとされていたこの休校措置は、結果として2020年度に入っても続くこととなりました。年度をまたぐという予想以上に長期間となったこの措置によって、来春の受験生にはどのような影響が出ると考えられるでしょうか。

受験生自身にとっては、これから受験学年になるところで休校措置が行われたため、勉強するためのモチベーションの維持や習慣づけに苦労したことも多かったでしょう。しかし、受験のためであっても何であっても、勉強というのは自分でしなければならないものです。学校も塾も通うのが難しい状況で自立して過ごすことができたのか、もしくは、気がつくとも何もできずに過ぎてしまったのか、ひとりひとり違いますが、この期間をどう過ごしたか考え、これから受験までの期間をどう過ごすのかがポイントになってきます。受験本番へ向かう前に、ほんの少しでも自分を見つめ直す良い機会になったと思われまます。

そうはいつても、実際の受験の現場には数ヶ月に及んだ休校による影響は大きいと考えられます。それはもちろん、学校での学習が進んでいないからです。このため、文部科学省は全国の教育委員会に対して、高校入試において特定の受験生が不利にならないよう、出題範囲や内容について工夫をするように通知を出しました。この通知では、地域ごとに休校期間がちがったことから、例えば、長期休校だった地域から、短期休校だった地域を受験するのであれば、一定の配慮を

することなどを求めています。通知ではほかに、具体的に中3の学習部分からの出題は適切な範囲にすることや、問題を選択できるようにすること、内申書の出席日数などが休校により不利益にならないようにすることなど、さまざまな方法による配慮にも触れられています。

近年、変わりゆく社会のなかで、「思考力・判断力・表現力等」が重視されており、入試ではこれらの資質が身につけているかを確認するようになってきています。大学入試改革から始まったこの動きは、高校入試や中学入試にも影響を及ぼしています。知識を基本として身につけることももちろん大事ですが、今の入試制度が思考力・判断力・表現力等をはかることに重点を置いているのは、来春の受験生にとっては朗報ともいえます。他の学年の子どもたちと比べると、知識をひたすらつめこみ続けるのではなく、考えを巡らせる時間があつたからです。

来春の大学入試は、センター試験が大学入学共通テストに変わる1年目にあたります。もともと大きく入試制度が変わる予定だったところへ、このタイミングで前例のない長期間の休校措置があつたことは、来春だけでなく、今後の入試制度への影響が出てくる可能性も考えられます。入試制度が大きく変わりゆくなかで、子どもたちはさまざまな資質を身につけ、自分の力で将来を切り拓いていく力を身につける必要性が高まっています。来春の受験生はもちろん、これから受験生になる子どもたちも、コロナ禍を乗り越えて受験に挑んでいくことにより成長し、よりよき人生を手に入れてほしいと願っています。

(文/学林舎編集部)

教育の行き先 学校の意味を問う

緊急事態宣言解除を受け、全国で学校が再開されました。3密(密閉、密集、密接)を避けるため、分散登校、短縮授業などを実施し、段階的に再開しました。とは言っても、完全に以前の状態に戻ったわけではなく、子どもたちは窮屈な生活を強いられています。

■授業

飛沫感染を防ぐため、教員や子どもはマスクやフェイスシールドの着用が必須となり、あいさつや授業中の発言も「大きな声を出さずに」が原則となります。そのため、対面授業の醍醐味である対話を通しての授業が難しくなり、教員の「ひとり語り」になってしまうケースもあるようです。タブレット端末のチャット機能を使って、子どもとのコミュニケーションを検討している学校もあるようですが、まだまだ実施できていない学校が多いのが現状です。また、ウイルスが飛び散る恐れのある歌唱や調理実習を当分は見合わせるなど、実施できない授業も出てきています。

■部活動や課外活動など

部活動や課外活動にも影響が出ています。部活動では、中学3年生や高校3年生にとっての最後の大会や発表会が中止になり、引退の節目を失った生徒もいます。学校や地域ごとに引退試合・発表会の場を設けるなど、卒業を控える最終学年の生徒に寄り添った対策が検討されています。また、修学旅行や運動会など、楽しみにしていた行事がなくなり、残念に思っている子どもも少なくありません。今後遅れを取り戻すために土曜日の授業や長期休暇の縮小が実施されますが、授業の詰め込みで子どもたちが圧迫されないよう、何かしらの形で発散の場を設けることが必要でしょう。

■3密を避ける対策による教員不足

3密を避けるため、空き教室を利用したり、臨時のプレハブを設置したりするなど、子どもを分散して授業を行う対策がとられています。これにより浮上している問題が「教員不足」です。教室を分けて授業を行う以上、教員の数も2倍以上必要になります。非常勤講師や担任を持っていない教員を総動員して授業を実施しているようですが、不慣れな教員が授業にあたるというイレギュラーが生じてしまいます。そのことにより、授業の進行やクオリティーに差は出ないかなど不安が残ります。しかし、教員数と授業のクオリティーが確保されれば、子どもひとりひとりに教員の目が届きやすくなるため、よい環境になるとも言えます。

■学校の意味

学校は、子どもたちにとって自身が所属する最大のコミュニティです。大前提として学習の場ではありますが、それと同じくらい、友だちや教員との関わり合いの場としての役割も大きいです。「休み時間に友だちとおしゃべりをする」、「授業で発言をして教員やクラスメートと一緒に授業を作り上げる」といった、これまでの「ふつう」が子どもたちの心身のバランスを保っているのではないのでしょうか。学校現場では、感染症対策に取り組み、安全を守ることも大切ですが、子どもたちがコミュニケーションを失わない環境づくりをしていく必要があります。

(文/学林舎編集部)

教育の行き先

9月入学の現状

新型コロナウイルスの影響によって休校が長引き、子どもたちの学習の遅れが深刻化しています。休校期間に失われた学校生活や学習の遅れを取り戻すために、9月始業を訴えた高校生の署名に端を発した9月始業・9月入学の議論は、検討を求める知事らの声明によって加速したように見えてきましたが、6月5日、文部科学省は、「制度として直ちに導入することは想定していない」として、導入の見送りを正式に表明しました。

9月入学の実施の検討にあたり、文部科学省からは、一斉実施案（2021年9月時点で満6歳になっている全ての子どもを入学させる）と、段階的实施案（2021年度は2014年4月2日～2015年5月1日生まれ、2022年度は2015年5月2日～2016年6月1日生まれの各1年1ヶ月分の子どもの新1年生として入学させ、5年間かけて段階的に移行する）の2案が示されました。今回は、9月入学の議論を進めるなかで出てきた、利点と懸念点について考えてみたいと思います。

9月入学の利点としては、休校による学習の遅れを取り戻すことができる。オンライン教育の実施状況や家庭学習環境などによる教育格差を是正し、入試への不安を緩和することができる。休校による学習の遅れを取り戻すための詰め込み教育がもたらす、子どもへのストレスや不登校などの問題を緩和することができる。時間的な余裕が生まれた事で、部活動や学校行事などの学習以外の時間を確保できる。欧米諸国と卒業・入学時期が統一されるため、留学などがしやすくなり、教育のグローバル化を進めることができる。冬の入試時期が夏にずれることで、インフルエンザ等の感染症や天候による交通障害を回避できる。などが挙げられます。

一方、懸念点としては、来年度入学する児童の増加による教師や教室の確保が難しい。4月就業を見据えて行われている各種試験の実施時期の見直しが必要となる。日本の会計年度が4月～3月であるため、予算の編成や就職時期への影響が出る。就学期間が延びるこ

とによる教育費が増え、各家庭の経済的負担が大きくなる。様々な法改正が必要となる。7歳5ヶ月での入学は、世界的に見て類を見ないほど遅い。就職時期が遅れることによって、生涯賃金が減少する。などが挙げられます。

2021年度の9月入学の実施は、教員の人材不足、社会のしくみや法改正の問題、経済的負担など、懸念点も多いことから見送られることとなりました。今回議論が行われた小・中・高の9月入学は、休校等によって失われた学習の遅れを取り戻す方法の1つでしたが、現行通りのスケジュールで、来年3月までの間に今年度中のカリキュラムを終えるために、夏休みなどの長期休暇の短縮・土曜授業や7時間授業の実施などが、すでに各教育委員会から発表されています。

この世代の子どもたちが、新型コロナウイルスの影響による犠牲者とならないよう、文部科学省には、学習内容の圧縮や第2波、第3波に備えたオンライン教育の整備なども含め、しっかりとした方針を示してもらいたいと思います。

今回の新型コロナウイルスの感染拡大を受け、日本の教育現場におけるICTの活用やオンラインの普及の遅れが露呈しました。時代の流れは一昔前よりも格段に速まり、目先の経済負担や法整備の困難さから、議論や実施を先送りしてきたこれまでのスタイルは、もはや通用しません。日本教育のグローバル化を進めるためにも、9月入学について前向きな議論が行われることを切に願います。

(文/学林舎編集部)

クロスロード Crossroad

第106回 文／吉田 良治

アスリートの選択

昨年ラグビーワールドカップで活躍され、今年東京オリンピック7人制ラグビー日本代表を目指していた福岡堅樹選手が、新型コロナウイルス・新型肺炎の影響で、来年に延期となった東京オリンピック7人制ラグビー日本代表から引退することを表明しました。東京オリンピック後、医師を目指すことを決めていたため、1年延期となった今ラグビーではなく医師を選択することになりました。日本人アスリートにとって珍しいこの選択は、国民から驚きをもって受け止められました。競技にもよりますがアスリートにとって活躍できる期間はそう長くありません。1年の差は時に大きくなることもあり、様々な選択が迫られます。

近年アメリカの大学へ進学する日本の若手アスリート（サニブラウン、八村塁、渡辺雄太選手など）が増えています。アメリカの大学でスポーツをする日本人学生にも大きな選択を迫られるケースがありました。以前私がフットボールチームでアシスタントコーチをしたワシントン大学では、女子テニスチームに日本人の荒川夏帆選手が在籍しています。荒川選手は現在4年生ですが、アメリカの大学スポーツは冬と春スポーツが新型コロナウイルス・新型肺炎の影響で中止となり、春スポーツのテニスをする荒川選手も、最終年の活動が途中でなくなってしまいました。アメリカの大学は春、秋、冬と3つのシーズンで構成され、テニスは春スポーツという位置づけになります。フットボールやサッカーなど秋スポーツが始まる9月まで、あらゆるスポーツ活動が中止となりました。大学もオンライン授業となっているため、荒川選手は現在日本に戻りネット経由で春学期の授業を受けてきました。4年

生ということで卒業も選択肢にありましたが、NCAAがもう一年出場資格を認めたため、荒川選手は来シーズンもワシントン大学女子テニスチームに参加する選択をしました。

ワシントン大学の女子テニスチームは学業が優秀で、冬学期チームP.P.Aは3.48、荒川選手はG.P.A3.58（春学期）でリーグから学業表彰を受けました。アメリカの大学スポーツは学業優先で、G.P.A2.0以上ないとスポーツ活動に参加できません。ワシントン大学は世界最先端の大学で、世界から高い評価（イギリス・タイムズ誌世界大学ランキング26位）を受けています。このレベルで学業優先でスポーツでも活躍できるのは、並外れた努力が必要です。アメリカでは大学でスポーツをする学生を“Student-Athlete”と呼び、国民から尊敬を受ける存在です。荒川選手は“I still have so much to learn as a student-athlete.”と、この“Student-Athlete”の意味を自覚して活動をしています。アスリートの前に学生としてどうあるべきか、コートの中だけでなくコートを出た後の学びが人間的な成長に直結していきます。もう1年大学で学生として、そしてアスリートとして、人間的な成長できる機会を選択したことになります。妹の荒川晴菜選手はすでにプロテニスプレーヤーとして活躍しています。いずれ妹と同じ道を選択するのかもしれませんが、大学での“Extra Year”が人間の土台作りにつながっていき、アスリートとしての幅を広げていきます。

今月NCAAはウェイトトレーニングやけがの治療など、自主的なスポーツ活動を認め、ワシントン大学は6月15日から秋スポーツを中心に一部のスポーツで活動が再開されました。まだ個人レベルの自主練ですし、PCRや抗体検査などが義務付けられ、様々な規制がある中、少しずつスポーツ活動が再開されています。荒川選手も夏以降渡米することになるでしょう。まだまだ不透明な状況ですが、彼女のワシントン大学に戻る選択が、人生の素晴らしい1ページとなること願っています。Good Luck!! (つづく)